

わけてやる。しかし、面桶の中に入つた金だけがそちに授かつたので、外へこぼれたのは、塵になるぞ、よいか、わかつたか。

『有り難う存じます、よくわかりました』

古茂藏は天に歡び、地に喜んで面桶を捧げた。

『そんなら氣を付けろよ、そちの面桶は大分穢が緩んで居るやうだぞよ』

と云つて、大黒様は徐かに袋の金をおわけなさると、チャラチャラと音がして金貨の流れ込む心持、イヤハヤ何とも譬へやうがない。

『どうしや、もうよからう』

『どうぞ今少し……』

『底が抜けはせぬか』

『なかなか』

金貨の泉は再び流れ込む。面桶はだんだん持ち重

りがして、古茂藏が手はふるへ始めた。

『そちはもう是で國中第一の金持だぞよ』

『へいへい……エー申し兼ねましたが今少し、せめて一つかみだけ願ひたう存じます』

『こわれはせぬか』

『今少しくらゐは大丈夫で御座ります。』

金貨の泉が三たび流れ込むや否や、面桶の底がボンと抜けて金貨は土の上にバラバラと落ち、忽ち塵になつて仕舞つた。古茂藏はアツとばかりに目を覺まして、あたりをキョロキョロ見廻はし、

『アー惜しいことをした、それも大抵の處で銀行へ預ければよかつた。』

(完)

月前竹

東くめ子

月すむ宵の窓のへに

軒端の竹の影落ちて

吹き來る風に打靡ひく 姿も聲も涼しけれ

床 夏 全 人

庭のみは錦をしけり荒れはてし

宿にすきたる床夏の花

夕 立 須川 ゆき

來てみれば露にしをれぬ花もあり

野末は雨のよぎて降りけん

晚 夏 高木 四郎

月影はすめとすまねど秋やこぬ

なつやは暮れぬ中空にして

花 火 同 人

あはれてふ程もあらせず中空に

はかなく消えてのこる星影

蜻 蛉 同 人

空たかくわがれあまつよかしくも

なれ皇國の名にし祀へれば

鎌倉山の月 東 翠 水

今も尙かまくら山にすむ月は

あれにしあどをいかに見るらん

亡母の寫真に 秋 影

一言も仰せ給はぬかなしざよ

ちとせ見るともうつしゑにして

述 懐 鈴木金太郎

徒に草木とともにくちもせば

人どうまれしかいやなからん

